「当事者性」を技術にする

－治療共同体モデルとしてのエンカウンター・グループの試行と効果に関する研究－

○　国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所（日本学術振興会特別研究員 RPD）　　引土　絵未（7570）

キーワード：治療共同体，エンカウンター・グループ，当事者性

１．研 究 目 的

治療共同体モデルとしてのエンカウンター・グループ[i]は，伝統的医学モデルのオルタナティブであり，依存症当事者のセルフヘルプ機能を中核としている．本研究ではとりわけ依存症からの回復を目的としたアメリカモデルについて取り上げるが，その特徴として，「利用者自身が治療共同体における社会化と治療過程の変化のための媒介者となる」（De Leon2000）機能の重要性を挙げている．また，エンカウンター・グループは治療共同体モデルにおける象徴的なグループの一つであり，その目的は，個人の行動面・感情面・社会的側面・霊的側面における問題について，メンバー間のフィードバックを基盤に多様な視点からの気づきを促すと同時に,グループに共通する課題を解決することであるとされる．つまり,「当事者性」を技術にすることで効果をもたらすグループの手法であると言える．

日本国内においては，物質使用障害の専門治療機関の乏しい状況において，薬物依存症当事者による社会復帰施設ダルク（DARC：Drug Addiction Rehabilitation Center）がその役割を一手に担ってきたが，その実際は，当事者コミュニティゆえの困難を内包している．これらの打開策として，20 余年前から欧米の治療共同体実践が着目され，その導入に期待が高まるものの,「鍵となる TC（治療共同体）の概念さえもほとんど共有されてこなかった」(宮永 2008)．そこで，本研究では，当事者社会復帰施設 A ダルクにおいて，2013 年より治療共同体モデルとしてのエンカウンター・グループの導入を試み，また，その予備的効果を検討し，一定の効果が認められた（引土ら 2015）．本報告では，2014 年よりエンカウンター・グループを導入した B ダルクにおける効果について併せて検証し,「当事者性」を技術にする手法としてのエンカウンター・グループの意義について考察する．

２．研究の視点および方法

B ダルクを対象フィールドとし，2014 年 4 月 1 日より週 1 回程度エンカウンター・グループを 1 時間半～2 時間実施した．調査対象者は，2014 年 4 月 1 日～2014 年 10 月 1 日の間，B ダルクのエンカウンター・グループに継続的に参加し，調査の同意を得た，B ダルクの入所者・見習いスタッフ 8 名とし，介入前 2014 年 4 月と，介入後 2014 年 10 月に質問紙を用いた調査を実施した．効果検証のための指標は，自己実現尺度 SEAS2000[ii]と基本属性（性別・年齢・利用期間・精神科通院歴の有無・主たる使用薬物・最終教育歴・最終使用時期）で構成した．データ分析では，AB ダルクによる各変数による有意差

（Pearson カイ 2 乗検定)、プログラム前の SEAS2000 合計および下位尺度得点と基本属性による有意差（一元配置分散分析)、SEAS2000 合計得点および下位尺度得点のプログラム前後の有意差（Wilcoxon 符号付き順位検定）と基本属性変数・AB ダルクによる有意差（二元配置分散分析）を確認した。

３．倫理的配慮

本研究は，日本社会福祉学会の「研究倫理指針」に基づくとともに，国立精神・神経医療研究センター倫理委員会の承認を得て実施した．研究対象者の研究への参加は任意であり，調査票は無記名とし、個人を特定可能な情報は収集しなかった。また、収集された情報は、個人の特定不能な変数として統計的に処理された。

４．研 究 結 果

対象者の年齢〔標準偏差〕は、A ダルク 36.1〔9.7〕歳、B ダルク 39.2〔7.1〕歳、全員男性で、施設間の各変数による有意差および、介入前の SEAS2000 合計および下位尺度得点と基本属性による有意差は認められなかった。対象者全体の SEAS2000 の介入前後の得点変化では，総得点（p＝0.02）と下位尺度「ありのままの自己肯定」（p＝0.01）において有意に得点が上昇した。これらに影響を及ぼす要因は認められなかった。

５．考 察

本研究で導入した治療共同体モデルとしてのエンカウンター・グループについて，所属ダルク・年齢・教育歴・既往歴・入所期間・使用薬物にかかわらず効果が認められた.

当事者コミュニティにおいて伝統的に活用されてきた経験的知識に依拠した回復物語は，当事者同士の相互作用もたらす一方で，ある回復物語からの排除も生み出す側面がある．エンカウンター・グループは，当事者が変化のための媒介者として機能する意図的な仕組みであり，ひとつの回復物語ではなく，多様な「当事者性」からの視点をもたらす手法である．このような「当事者性」に依拠した技術は，新たな専門性として重要な示唆をもたらすと考える.

今後は，対象フィールドを拡大し調査結果を蓄積すると同時に，体験的に伝承されるこれらの技術について言語的・理論的な理解を深めることが課題となる.

【本研究は科学研究費助成事業（特別研究員奨励費）（課題番号：26・40189）の助成を受けて実施した.】

---

[i]エンカウンター・グループは，人間性開発運動（human potential movement）として広くメンタルヘルス領域で発展してきたが，治療共同体のエンカウンター・グループはそれらとは独立しセルフヘルプ・グループプロセスを発展させたものとして位置づけられる（De Leon 2000).

[ii] Rogers などが提唱する心理領域におけるエンカウンター・グループにおける効果測定を目的として作成された自己実現尺度 SEAS(Self-Actualization Scale)の改訂版(坂中 2003).